

Title	トマス・ヒル・グリーン「イギリス革命講義(全四講)」(四) : クロムウェルの共和国時代
Author(s)	田中浩, 佐野正子訳
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No. 45
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2019
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

トマス・ヒル「イギリス革命講義（全四講）」（四）
・グリーン——クロムウエルの共和国時代——

田中 浩
佐野 正子 訳

* 訳文中の（ ）内はグリーン自身の注であり、「 」内は訳者による付加および注である。

前回の講義では、クロムウエルがウースターから帰還して議会に出席したことにより、新選挙体制と全体的な政治的配置についての問題が再度取りあげられることになった。これら未だ見えてまいりました。これらの問題は、それまでの二年間、共和主義的寡頭体制では、見て見ぬふりをして避けてきたものでした。これらの問題解決を押しすすめるにさいしては、クロムウエルは、かれのこれまで押し通してきた考え方——さまざまな立場を取り入れるというかれ本来の考え方——を崩すことはなかつたのです。一六四七年夏、国王の代理人としてクロムウエルと交渉したバークリーの『回想録』からわかることは、軍隊か寡頭制的議会かにもとづく狭小な基盤のうえに政府を確立することは困難であると、クロムウエルがそのとき自覚していたということです。当時クロムウエルが企てていたことは、国王が新議会を召集し、その議会から王党派を閉めだすことを国王が宣言することを条件に国王を復位させるというものでした。この企ては、国王が軍隊の監督下におかれていた時期に、軍隊が国王にだした提案の原案であり、その後この提案は状況の変化に応じて拡大され変更が加えられ、翌年の議会に提案されました。その提案 [A Representation from his Excellence Sir

「Thomas Fairfax and the Army」では、現在開会中の議会は一年以内に閉会し、その後は、二年ごとに議会選挙がおこなわれ、会期は百二十日以下であつてはならず、また二百四十日を超えてはならないこと、さらに人がほとんど住んでいない町からの議員選出はやめるべきこと、税金の徴収額に応じて、これまで非選出の州からも議員を選出することができることなどが規定されています。また過去に王党軍の兵士であつた者は、五年間被選挙権がないこと、旧枢密院は國務會議にとつて代わられ、そのため七年任期の國務會議のメンバーがただちに決められ、以後は議會によつて任命されること、主教たちの強制権は廃止され、『共通祈祷書』を用いることと、「厳肅な同盟と契約」に契約することはどちらも強制されないこと、このような条件のもとでのみ王制は回復され、広範囲にわたる大赦が実施されるべきこと、ただし議會には五名に限つて特定人物をこの恩赦から除外できる権限が与えられることなどが規定されております。

この文書は、アイアトンが書いたものと考えられています。クロムウェルよりもアイアトンのほうが文書作成にたけていたのです。当時クロムウェルは、アイアトンの妻であるかれの娘に送つた手紙のなかで、なぜ自分がアイアトンではなく娘に手紙を送るのかという理由を「わたしがひとこと考えを述べるとアイアトンはさまざまな方策を打ちだそうとする」ので迷惑をかける」からだ」と述べています。ホワイトロックは、「これらの軍の宣言や議事録は主としてアイアトン大佐が作成し執筆した」（『回想録』第二巻、一六二頁）と述べています。また、ホワイトロックは「アイアトンは勤勉かつ想像力豊かな人物であつたが岳父であるクロムウェル副司令官の激励とあと押しによつて、力量以上の仕事をこなした。アイアトンは法学院育ちであつたが、法的知識にうかつたので、かなり間違いを犯した」とも述べています。以上に見たようにアイアトンはさまざまな方策をたてていたが、立案はアイアトンのものというよりは実はクロムウェルのものであつたのであつて、アイアトンはしよせん政治家であつて、クロムウェル以上の再構築計画を案出することは困難であつたと思われれます。もしこの計画が完全に実施されていたなら、真正な議会統治と自由な国家教會在同時にイングランドに実現し、その後の二世紀にわたる選挙区の売買や汚職による統治はなくてすんだことでしょ

う。また教会が国家に、国家が教会に手を干渉したりすることもなかったと思います。しかし、われわれが見てきましたように、チャールズ国王はこの提案を拒否し、新たな政治取引を始めました。そして以上のような和解の機会は二度とおとずれることはありませんでしたが、クロムウェルの「和解を求める」目的は少しも変わりはありませんでした。ただしそれを実行するやり方は成り行きによつてさまざまに変わりましたが。旧来の利権、「国王」と新しい情熱、「クロムウェル」を調整して両者の合意を成立させようという願いは、クロムウェルのその後の行動如何にかかっています。もつともわたしが十分に説明いたしましたように、この調整は「真新しい布ぎれを、古い着物に縫いつけはしません」「新約聖書、マルコによる福音書二章二一節」とありますように、実際には不可能なことでした。歴史を冷静に振り返つてみますと、利権を優先しようとする情熱は、詩を散文に墮落させようとするころみに等しいものなのです。それがうまくいかないことは当然でしょう。なぜなら、それは、その本質が動的、否定的、抽象的であるものを、固定的、肯定的、具体的なものにするようなものだからです。霊と肉を突然に無理に一致させようとしたり、肉を霊的なものに一致させようとすると、実際には、霊が肉体化してしまうようなものでありましょう。いずれにせよ、クロムウェルがもくろんだ和解が絶望的なものとなったことが、クロムウェルのその後の人生の悲劇となりました。「聖的なもの」を守ることはかりを強調いたしますと、それにたいしてかならず「現世的な混合物」が純粹な霊的情熱を凌駕するようになります。「聖徒たち」の眼には、クロムウェルが、神の民に仕えれば仕えるほど自分自身の魂を失った者のように見えたのであります。しかもかれの良心は、同情心に満ち満ちていて、「聖徒たち」になんと言われようと弱まる気配はありませんでした。おそらくかれの「良心の」かかえた重荷は、かれが「わたしはかつて神の恩寵のもとにあつたことを知っていた」という死の床での心の叫びに見ることがができます。

クロムウェルには、特別な偽善者という敬称が奉られたある種の特質と信念があり、それらはかれの外面に現れた行動によく見られます。しかし、現存するかれの書簡を見ればわかりますように、この特質と信念は、かれが心のうち

では、和解したいという真実の目的のために必要な形成力となる媒介物であり、もしこれらがなければ、かれはこの目的を他人の心に働きかけることができなかつたでしょう。われこそがこれまで見下されてきた神の民「分派」のために選ばれた擁護者であるといった信念が、クロムウエルの行為の究極的な源泉でありました。この信念が、分派の集まりであつた軍隊をひとつにまとめ、それを勝利に導いた指導力となつたと思われまふ。そしてこの信念を実現するにあつては、時の流れにさからわれないこと、また大きく異なるさまざまな見解をもつ人びとの、そのときどきの考え方の成りゆきに身を任せることが、(いま風の言い方をすれば)クロムウエルのやり方でありました。この人びとの大方の考え方に沿うというやり方は、ときに迎合的でその表現方法がおおげさに見えましようが、それがまかつたく心からのものであつたことは、クロムウエルのやり方が明らかに人びとの心に訴へたことによつても分かります。実際その人びとにたいする共感ほうそいつわりのものではありませんでした。もつともクロムウエルは、共感した人びとの教義ならばどれでも積極的に支持したということではありません。それどころか、かれは、使えらと思えばあらゆる手段を用いて、かれがそれまでおこなつてきたように、良心の自由にもとづき神の教えを守るために一貫して忠実であつたことはあきらかでありまふ。クロムウエルは、行動をともにする者たちの性格や信念のうちに存するすべての要素を熱心に理解しようといはしました。かれがその目的を推し進めることができたのは、このことのゆえであつたと思われまふ。なぜならかれがその目的を推進することをやめたときには、かれの共感も失われたからです。クロムウエルのこのようなやり方は、かれの行動にたいして、とうぜん、自分たちは、かれの利己的な目的のために利用されたのではないかという思いでした。かれの同時代人や後代の人びとのなかでかれにあまり好意をもつていない者たちのあいだで、かれの評判が損なわれた理由のひとつは、皮肉なことにクロムウエルが自分の仕事を完遂させようとした行動そのものにあつたのでした。クロムウエルは自分の評判などはほとんど気にかけていなかったのですが、自分がなにをなすべきかについては大いに意を用いておりました。そのことは、われわれにしてみれば、なにかが起ころるべくして起こつたと見ると

きに、成り行きに逆らわないと表現することがらを、クロムウェルは、それは神の「摂理の出現」と認識していたのであります。これは神の導きによるものであるという信念が、この導きを実行するさいにかれをいちだんと大胆にさせるとともに、利己的な関心をもつことからは遠ざけたのです。そうした考えについては、ハミルトン軍を敗走させた直後にオリヴァー・セント・ジョンへ宛てたクロムウェルの書簡のうち、見てとることができます（カーライル、前掲書、第六七書簡）。「親愛なる兄弟であるH・ヴェーンのことを心にとめおいてください。ヴェーンが摂理の出現を軽視しすぎないこと、わたしがそれを重視しすぎないことを祈ります。……われわれは（皆このような働きを）人びとがどう思うかについて気にしないようにしましょう。人びとは、喜んでするにせよ、そうでないにせよ、神がよしとされて喜ばれることをおこなうでしょう。そしてわれわれは、子孫代代に仕えるのです。われわれは安らぎを別のところに求めます。それは永続するものとなるでしょう。われわれは明日についても、どのようなことについても心配することはありません」。本心から述べられたこのなまなましい言葉は、クロムウェルがのちにヴェーンやより先鋭な共和主義者たちから離れていったことを物語っています。クロムウェルはヴェーンについて、政治的な危機の時代にはかれなしにはなにも偉大なことは達成できないという思いをいっていました。それは、個人的な平和や名誉がその行動によって損なわれるとしても、ヴェーンを通してなされなければならない神の働きがあると感じていたからでした。共和主義者たちは、理論と原則を重んじる人びとであり、「勇敢で真実な人びと」でありましたが、「自分たちの評判にかかわる」ものについてこだわる意識を強くもつた人びと、あるいはいささか好意的に言うならば、たんなる自己主張にすぎないものを擁護するためには、自分自身や国家を犠牲にしようが気にしない人びとでした。そのような人びとは、この時代に「より劣った部類の仲間たち」のなかで英雄的役割を演じていると考え、そのためおそらくかれらが当然に受けるべき人びとからの信望をえることができなかつたのです。したがって、われわれの目的は、政治的な賭博師^{とぼくし}であるかもしれない「摂理に従う人」「クロムウェル」と、原則重視の人とを対比して評価することではなく、両者の衝突が避ける

ことのできないものであったことを示すことだけなのです。もしクロムウェルが政治的な賭博師であったならば、かれは自分の手の内を決して見せようとはしなかつたでしょうし、深く注意もせずに書いた手紙や、「かれの話には四つの言葉しか記憶に残らない」といわれた演説などの奇妙な資料を集めてみても、それらのうちにクロムウェルの魂の発露があるを期待すべきではないでしょう。

前回の講義「第三講」でわたくしは、次のようなことをお話いたしました。すなわち一六四八年初頭の国王との交渉打ち切りの決議によつて、独立派ならびに軍隊が国王と決定的に決裂した時点から、クロムウェルがハミルトン軍「ジェームズ・ハミルトン（二六〇六―四九）、一六四八年八月にクロムウェルは王党派のハミルトン軍をプレストンで破り、第二次内乱を終結させた」を壊滅させるために出発した時点までの間、クロムウェルは、いまや不可避となつた共和国設立のために、共和主義を公言している派閥だけではなく広範な人びとの支持をえるために、各派を和解させようと奮闘したことをお話いたしました。長老派と共和主義者は、いずれも扱い難く、いふなれば自分たちの原則に固執していて、とうてい和解は不可能でありましたし、また一時的には共和派が優勢のときもありました。共和主義者たちは、聖書の「共和制にかんする」文言にくわしく、オランダとスイスの自治共和制から学んだ権利論「人民主権論」にも長じており、わき目も振らずに一直線にわが道を進んでいました。そしてクロムウェルは、そのような精神がどこへ向かうかをよく知っていたので、かれはあるときラドロウとの会話のなかでそのいらだちを爆発させたことがありました。「共和派は高慢な連中で、独断と偏見でしかものごとを考えようとしない」と述べていました。しかし、クロムウェルは、共通の敵を倒すためには、なおしばらくの間はかれらの高慢さを放任せざるをえなかつたのです。遠征の間、ことの成り行きの論理つまり「出現した摂理」の論理の指し示す方向は、さらに明確になりました。そうした認識がクロムウェルの書簡のなかに随所にあらわれてまいります。勝利の戦いに歓喜して、クロムウェルは以前の宗教的熱狂すなわち聖徒たちの選ばれし指導者としての自覚を思い起こしておりました。かれは戦いを通して、「神の」正しき

審判がくだされ、また「驚嘆し感嘆したことに」、かれのかかげた大義が「戦いのなかに」示されていると考えていました。「たしかに閣下「議会の議長」、これは、神の手による以外のなにもでもありません。この世のなにかを高くあげたり、高みの座につうとするものを、神は低く押さえられます。なぜならこの日は、神のみがほめたたえられる日なのです。わたくしが御忠告申しあげたいことは、閣下および神を認めるすべての人びとが、神をあがめ、神の民を憎まないようにと切に祈るだけであります。神の民とは、神にとつては目に入れても痛くないほどの大切な者たちであり、王たちでさえこの神の民を守るためには戒められるときがあるのです」（カーライル、前掲書、第164書簡）と、クロムウェルはプレストンでの勝利後議会の議長宛てに手紙を書いております。

王党派の「義務不履行者」にたいして軍隊の激昂が制御できなくなり、イングランドにおける王党派の長老派にそのかされ援助されたハミルトンが侵攻したことにより、長老派と共和派との提携は不可能となり、そのために共和政は、共和主義者と軍隊のみが代表せざるをえなくなつたということが、以後の新しい統治が平凡なものになつた要因と言えるでしょう。これが、クロムウェルのこの判断とその結論が、かれ自身の思考のなかで結合し融合した熱情の「驚くべき錬金術」であつたと正しく理解するまでは、われわれはかれの判断を真に理解しえたとは言えません。どういふ経過をたどつてかういふ判断にいたつたかは、ハモンド大佐宛の書簡に表現されています。この書簡は、議会多数派の長老派が、王と取引し、王をロンドンへ復帰させることを決意したことが明らかになつたときに書かれたものです。この書簡の目的は、差し迫つていた議会の投票は（すでにわれわれが見たように）、自由な良心の主張を破滅におとし入れるものとなるから無視するように、また国王を軍隊に引き渡すようにハモンドを説得することにありました。「神が諸国に任命した権威にたいしては、能動的であれ受動的であれ服従すべきだとあなたは述べておられます。そしてこの権威はイングランドにおいては議会に存するのであります」とクロムウェルは書いています。そしてこの見解にたいするクロ

ムウエルのハモンドへの応答は続きます。「権威と権力は神の定めるところにあります。しかし、権威と権力はそれぞれ人工的な制度であり、そのためその権威と権力には限界があり、個々の状況によって多かれ少なかれ束縛を受けま
す。したがって、わたしは権威者はなにをしてもよいとは思えず、そのような者への服従は正当だとは思いません。と
きには抵抗することが法にかなうばあいがあることは皆が同意しています。……問われるべきは、われわれが直面して
いる状況がそれにあてはまるかどうかであります。この問題へ答えるためにクロムウエルはハモンドにたいして次の
三点を考慮するように求めています。「第一に、公共の福祉が確保されているかどうか。第二に、盟約のすすめ方につ
いて」（すなわち提案した盟約について）「わが真に主なる神のまえで——そして神のまえでは良心が確立されていなけ
ればなりません——、公共の福祉が保持されているかどうか、あるいは、戦いの成果が全体的に失敗に終わり、以前
の状態よりもさらに悪い状態へ陥っていないかどうか。……第三に、この軍隊が、国王と戦うさいにある明白な根拠
にもとづいて、神に召された軍隊であるかどうか、またこの軍隊がその目的に應じて、ある権力とは武力をもつて戦
い、他の権力とは戦わないといった合法的な軍隊であるかどうか、なぜなら、そのような権威は、権威のもつ力によつ
て争いを合法的なものとするのではなく、その争い自体が合法なものかどうかであるから。……親愛なる友よ、さまざ
まな摂理のしるしに目を向けようではありませんか。たしかに摂理のしるしはなにかを意味しており、相互に関連し
合っています。摂理のしるしはすぐれて一貫しており、明瞭であり、かつ曇りなきものであります。「聖徒たち」と呼
ばれている神の民を根絶しようという悪意が——その悪意はいかに膨れあがろうとも——神の民にたいして向けられて
います。しかし、かれら（聖徒たち）は、「武器をとり防衛し、ますます祝福されています。したがって苦難の原理を
受け入れる人であれば決して軽視されないように、……われわれが神の御意志を確かめようとするのは、困難に遭うの
を恐れるからではなく、信仰をもたないままに、つまり信仰なしに行動するのを恐れるからです。もし主なる神が、た
いていそうなさるのですが、神の民に合法的であれさらには義務を果たせと説得されたならば、この説得は信仰的行な

いとなるのです。そしてこの説得が困難であればあるほど、それに従う信仰はより強固なものとなるのです。……われわれの友人たちのなかには、受け身の原則に立つがゆえに、義にして正直な生き方を見逃す者があるのではないでしょうか、そして神の民は、なんらかの仕方です、より大きな善が積めるものと考えたのではないのでしょうか、主なる神が譲らなかつたこの男「クロムウェル」の示す善を、他の仕方です。あなたの知るこの人物の！」（カーライル、前掲書、第八五書簡）。

この書簡に見られる情熱が真摯なものであることには、疑いの余地がありません。もつともそれが自己欺瞞をおおい隠す危険なものであるかどうかは、はっきりいたしません。しかし実際のところ、クロムウェルの情熱がすみずみまで行きわたっていることこそが、革命史全体を説明できる唯一の鍵であると思います。たとえばクロムウェルが、諸分派を指導するのに必要なものとして、諸分派に「仕える霊」への共感を示したことが、「公共の福祉」への強い情熱を必要とする明確な判断と結びついていました。またわれわれの偉大な宗教戦争がたんなる流血に終わらず、イングランド社会の実際的前進につながったのは、そのような奇妙な諸性質を内包していた人物がいたからです。

クロムウェルが莊嚴に述べていたように、「自分自身の選択ではなく、神の摂理と決断」が、君主制を廃止し、共和制がそれを取って代わることをかれになさしめたのであります。そしてかれは新議会のもとで、諸利害を全体にわたって調整する作業を再開したのでした。しかし、いまでは「聖徒たちの利益」を確保すべき調整の可能性は、一六四七年にチャールズが、短気を起こさず迷信にまどわれずに、公正なる合意をなしていたばあいと異なつたものになつておりました。その当時クロムウェルは自分の統制のきく評議会のもとで国王を復位させることによつて、王制というなじみ深い名称のもとで、統一的な主導権を手中におさめることを望んでいました。そして、その王制というなじみ深い名称はいつの時代でも重要であります、内戦によつて過熱した諸党派間の争いという混沌から抜けだし、秩序を回復しようとするときにはとくに重要でありました。その後のとるべき選択肢は王政か共和政の二つしか

ありませんでした。一方のなじみ深い統一方法は、最終的には人びとに祝福されたかの王政復古のように、「聖徒たちの利益」を完全に制圧することよつてのみ可能でした。もう一方のなじみのうすい統一方法は、剣を振りかざし、さまざまな分派を武力によるかまたは共感によるかして統御できる気性の持ち主によつて維持されるという条件——もつともこの条件はその人物「クロムウエル」の死によつて終わるのですが——においてのみ可能でした。しかし、軍隊のクロムウエルへの熱狂的な信頼度は依然として強力で、クロムウエルもこの「聖徒たちの」作業を指示する情熱をもつていました。ホワイトロックの日記には、チャールズの処刑「一六四九年一月三〇日」からまだ一ヶ月も経つていない二月二五日に、「国務会議から帰つてきたクロムウエルとその娘むこであるアイアトンは、わたしと夕食を共にいたしました。そのときかれらは、とても陽気で上機嫌のように見えました。話は夜半の十二時過ぎまではずみましたが、かれらは内戦や、ロンドンにおいて軍隊が議員たちを捕えたい、いかにみごとと神の摂理が働いたか——そのすべてにおいて奇跡が起こりました——についての話をしてくれました」と書いてあります（ホワイトロック、前掲書、二巻、五四〇頁）。しかしクロムウエルは、かれが長いやり方を通じて期待していた摂理が成就したかどうかについてはまだまだ学ばなければなりませんでした。なぜなら摂理は、ピューリタン哲学だけでは、思いもつかないほどの広汎な内容をふくんでいたからです。

翌春、クロムウエルは、アイルランド征服のための軍司令官に任じられました。その後かれは、一六五〇年夏に呼びもどされ、その後まもなくしてスコットランドへ派遣されました。したがつて、一六五一年のウースターの戦いから帰還するまで、クロムウエルは政府の中枢にあつて、調整と改革の政策を推進する機会がまつたくありませんでした。他方、この時期におけるクロムウエルの政治活動を見ますと、そこには一貫したあるひとつの方向性があつたことがわかります。国務会議に入るようにヴェーンを説得し、ヴェーンの見解に合うように用務内容を変更したのはクロムウエルでした。したがつて、軍隊による統治をとくに嫌つていた、しかし当時もつとも有能であつた人物を政府に復帰させた

ことは、クロムウェルが自分自身の道を明らかにするためであったとしたら不自然な行動だということになりましよう。しかし、その目的が全体的な調整をはかることにあつたとしたら自然な行動だと言えます。さらに、一六五〇年の夏、フェアファックス指揮下の軍隊をスコットランドへ送ることが提案され、フェアファックスが、「長老派聖職者たちと、かれらの重要な支援者であつた妻に説得され続けた結果」内戦の正当性に疑問をもちはじめ、ついには軍の指揮権を返上しようと決心しかけていたときに、まづ先にその地位にとどまるようにフェアファックスを強く説得したのはクロムウェルでありました。当時の回想録の著者たちは、クロムウェルへのねたみ心も手伝つて、その出来事をのちに、このときのクロムウェルの熱心さは見せかけのもの、すなわち「親切を」よそおつた一連の狡猾な振る舞い」と述べていますが、もしこれが見せかけのものだったとしても、その目的がなんであつたのかをかれらは説明していません。もしかれの目的がみずからの出世「勢力拡大」のためであつたとしたら、軍の指揮権を他人「フェアファックス」の手にゆだねたことはその目的からはずれるものであつて、説明がつきません。他方、もしその目的が全体的な和解を求めるものであつたとしたら、かれが長老派への共感と諸分派への寛容を合わせもつ人物という点において、長老派の利益を共和制と調整しようとしたことは至極自然なことでありました。

しかし、ピーターズ氏が「クロムウェルがいまやイングランドの国王となるべきである」と述べたのですが、この時期にはクロムウェルにはそのような考えはありませんでした。しかし自由な国家における「聖徒たちの自由な教会」を、なんとしても樹立させたいという思いと、われこそは「内なる熱き証言」「神の言」の達成者なりとする自覚は、かれの心のなかで確実に強まつていきました。ヨシユアがカナンへ軍隊を率いていったように、クロムウェルはアイルランドへ軍隊を率いていきました。そしてかれがミルフォード・ヘイヴンから船出するときには議會へ宛てた最後の書簡において、正直な人びとの良心を抑圧する刑法の条項を削除することを熟考するように提案しております。アイルランドおよびその後のスコットランドのクロムウェルの征服は、いつもと変わらない激しい情熱によつて達成されまし

た。かれはトレダシユの急襲のあとで、「偉大なことは、権力や武力によつてではなく、神の靈によつてなされなければならぬ」ということが、わが勇士たちの一部の心のうちに浮かびました。そして、それはまことにその通りではないでしょうか。味方の兵士たちをしてあれほど勇敢に急襲させたのは、神の靈でした。神は、味方の兵士たちに勇気を与えたり、なえさせたり、他方で敵の兵士たちに勇気を与えたり、なえさせたりします。そしてまた味方の兵士たちに勇気を与え、このような喜ばしい成功をかれらに与えたのです」と書いています（カーライル、前掲書、第一〇五書簡）。二つの内戦の間をはさむ短いロンドン滞在中における、ラドロウとの会話を通じて、クロムウエルの関心は、迅速な改革、とくに法改革の必要性に向けられていたこと、また「詩編」一一〇編に鼓舞されていたことがわかります。この詩編は「主はあなたの力ある杖をシオンから伸ばされる。……あなたの民は進んであなたを迎える。聖なる方の輝きを帯びてあなたの力が現れ、曙の胎たまから若さの露があなたに降るとき」というものです（ホワイトロック、『回想録』、一二三頁、一七五一年）。スコットランドへの遠征の経験は、クロムウエルの理解によれば、奇跡的な経過に満ちており、それが神から与えられた任務であるというかれの自覚を強めました。『使徒言行録』第二章にあるように、世の人の目には酔つ払つているように見える靈もあるでしょう」と、クロムウエルはスコットランド教会の総会議に宛てた書簡に書いております（カーライル、前掲書、第一〇六書簡）。このような靈的充溢に包まれて、かれは九月二日、ダンバー近辺で生気のない半ば飢餓状態にあつた軍隊とともに駐留していました。それにはたいする敵軍の数は二倍ほどで、かれの陣地を圧倒しているようにみえました。しかし、かれはまさに「敵の数、敵の有利さそして敵の自信のゆえに、そしてわれわれの弱さ、われわれの苦境のゆえに、われわれは山に、主の山において見いだされ、主がわれわれのために救いの道をお与えくださるであろう」とし、「主の摂理の崇高なはたらき」によつて、レズリーは作戦を間違え、救いの道が見いだされたのです。「主がこれをなしてくださいと言うことができます。神を誇りに思いつつ、わが歩兵連隊が行進するのを見聞きするのは、なんと心地よいことではありませんか。勝利はあなたがたの手中にあるのです。そ

してこれらの大いなるしるしによつて、神はそれをさらにいつそうあなたがたのものにされることでしよう。神に勝利の栄光を帰し、神を讚美することによつて、あなたがたの権力と神への祝福が増したのです。……あなたがたは自己を捨て、あなたがたの権利を獲得しなさい。……抑圧されているものたちを救い、イングランドにおける惨めな囚人たちのうめき声に耳を傾けなさい。どんな職業であれ、それに付随する権利の濫用を進んで改革しなさい。そしてもし少数者を富ませるために多くの者を貧しくする者がいれば」（これは法律家にたいする当てこすり）、「それは共和制にはふさわしくありません」（カーライル、前掲書、第一〇六書簡）とクロムウェルは勝利のあとに議会宛に書いています。

一年後、ウースターから帰還したさいにクロムウェルの顔が輝いていたのは、またわれわれが見てきましたように、議会にもどつた最初の日に、調整と改革を推進するようにかれの心を突き動かしたのは、王位に付こうというような低次の野望などではなく、神のはたらきに力を尽くしているという満ち足りた歓喜の心からでした。この時期にミルトンがクロムウェルについて書いているように、「平和は、戦争の勝利に劣らぬ榮譽を与えます」「ソネット」一六番」。しかしこの勝利は数日間であられるのではなく数世紀を通じてかち取られたものであり、情熱的な活力によつてではなく、思考を働かせる活力によつてかち取られたものなのです。クロムウェルがかつて自分自身について「自分はしばしばものごとをやり過ぎるような行動をとる」といった気質があると語っていました。そしてクロムウェルに信頼された「娘むこのアイアトン」は、その「利発な頭脳」で「クロムウェルの考える」計画をより慎重に思慮深く考える人物でしたが、もはやクロムウェルの身近にいて、かれを制止することができなくなりました。なぜならアイアトンは、ウースターの戦いの三ヶ月後に、任地のアイルランドで命を落としてしまつたからです。アイアトンの死は、「クロムウェルに大きな悲しみを引き起こした」（ホワイトロック、『回想録』、第三卷、三七一頁）と伝えられています。「アイアトン以外にクロムウェルを説得したり道理を説き明かす者はいませんでした」。もつとも、もしアイアトンが生きのびていたとしても、ときにクロムウェルを制止できたかもしれません、かれの性格を変えることはできなかったでありま

しよう。もしクロムウエルがアイアトンと同じ時点で亡くなっていたとしたら、クロムウエルもアイアトンのように高潔な共和主義者という名声をえていたことでしょう。のちにクロムウエルは共和派から離れます。それはかれが軍隊の改革と再構成を押し進めたことによるのですが、これはもともとアイアトンが構想していたものでした。ダンバーの戦いのあとで議会に宛てたかれの書簡（かれの率直さをみごとに示した例ですが）によりまずと、調整「軍の再編」をすすめるにさいして「うるさく要求をだして軍人たちを突きおとすようなことはしたくない」という願いを明言しています。そしてかれは、自分の職務を忠実に実行しました。しかし、一六五一年九月一六日から五三年四月二〇日までの約一年半の期間には、かれは状況の必要性に合わせて、共和派の「残余議会の」少数独裁政治を実現させようと誠実に努力しました。かれの要求が強制的なものでなかったとしても、民衆の要求はそうでした。そして、議会はそれ自体の存在とはなにかという実地的な「存在理由」を示さなければならず、それができなければその威信を失うことは明らかでした。地方からの請願書が絶えず届いていました。そしてその内容のすべては前回の講義でお話しました「平等派」の意見に似たものでした。それらの請願に共通する問題点は、レビ・ユダヤ教的あるいはローマ・カトリック的のみなされた十分の一税が廃止されるかあるいは公庫に集められ、その一部を各州の聖職を維持するための費用に充てられるべきこと、「酔っ払いで、性根が悪く、恥ずべき行為をして神聖さを汚す」くせに聖職者となっているものたちを自分の生活費は自分で働いてかせぐようにさせること、正義は買いとられるのではなく与えられるべきこと、自他の所有権にかんする訴訟はすべて無償でかつ成文法にもとづいて裁定されるべきこと、だらだらと時間のかかる訴訟により、抑圧されたものたちからえられるパンで養われている一群の法律家、法廷代理人、下級弁護士たちになんらかの抑制を加えることなどでありました。なぜなら、ときにはかれら「法律家たち」は大きな口を叩き、「裁判が、もつとも貧しい者たちの頼ることのできる、またもつとも富める者たちでさえもそれを避けて通ることのできないほどの力強い奔流となつて流れくだつていくように」と述べていたからです。その間に残余議会は、その活動が以前は不活発であったこと

を考慮すると、おそらくクロムウェルからの圧力があつたと思いますが、苦情検討委員会を設置したり、議決を促進したりして活発な活動をして見せました。そしてそれらの議決が、もし実行されたばあいには、イングランドの訴訟を実際上これまでかかった費用よりも安く抑えることができ、またイングランドの土地「売買」はより自由なものとなったでしょう。しかしながらそうした立法がなされたことはありませんでした。なぜなら軍隊が国家の真の議会「代表機関」であり司法機関であるという古い信念がよみがえり始めたからです。一六五〇年の終わりに「軍の将校たちはランバートの委託により、党派間の係争を裁決した。そのさいに民衆は十分な聴聞を受け、迅速な処理がなされたことに大いに満足した」という内容の書簡が議会で読みあげられ、同時に軍のなかでは、権力濫用の改革案と、新議会にかんする請願書が回付されていた」とあります。それは、以前（一六四八年）に軍が政治権力「議会」と直接接触していた時期に一般におこなわれていたのと同じ考え方でした。実際的に議会が、真の唯一の支持基盤である軍の聖徒たちとふたびまともに向き合ったことです。軍の聖徒たちにとっては、古くさい共和主義の思想は、それが「諸利害」のきびしい世界のなかで、その利害を生みだすものを改革する情熱を実現できなければ、ほとんど役に立たないものでした。しかしそのような改革を実現することは、そもそもそれが可能だとしても、つねに不人気でますます党派的になりつつあつた寡頭制支配にとつては、あきらかに不可能なことでした。

この危機の間にクロムウェルがどのような行動をとつたのかの詳細をたどるすべをわれわれはもっていません。しかし、かれが自分の考えを秘密にしようとしていなかったことは明らかです。かれは、一六五一年一月の議会で、その会期を終えるという決定をしました。それははずつとあとの一六五四年一月にやつと実現しました。次の問題は、当然に新しい選挙と再編成のための全般的な作業をどのように統制すべきかということでした。王党派ジェントリーと「事態の推移に」怒つた長老派聖職者たちが存在するなかで作業をすすめるには、それに強力な統制が必要であることはまったく明らかでした。この統制を残余議会の少数支配者たちの手にゆだねてよいものでしょうか。なぜならかれ

らは軍と不仲で疎遠になっており、そのため審議機関として迅速かつ秘密行動をとることができないからです。それともこの統制は、「人びとのあいだで」恐怖と希望がないまぜになっているひとりの人物、また自分の心と軍の心が一体化している人物にゆだねてよいものでしょうか。これは現実に論議の的になっていた問題でした。そしてこの問題は、一六五一年の暮れに、クロムウエルが招集した会合において、議会の有力者たちと軍將校たちに向かつて明言したことで知られております。しかし、その時点になっても、一六四八年の時点と同様に、「両者の間での」相互了解に達することはできませんでした。議会の有力な法律家たちはおおむねひとりの人物に統治をゆだねることに賛成でした。しかし、このひとりの人物がだれであるかについては、セント・ジョンズのみがクロムウエルと共通の見解をもっていたようでありませぬ。ホワイトロックは、グロスター公爵による君主制の回復を願っていました。軍の熱狂者たちにとつては、君主制という名前自体がキリストにたいする冒瀆でしたから、かれらは、キリストが聖徒たちの王国を早急に回復することを期待していたのです。残余議会内の共和主義論者たちは、ヴェニススの政治制度を模範として、自分たちによる恒常的な主要機関を確立し、空席が生じたときにのみ議員を補充していくことを望んでいました。

一六五二年は、このようなやつかみやもろもろの見解の対立やゆきづまりのうちに過ぎ去りました。わずかに活力が見いだされたのは、オランダ戦争を遂行したことと、スコットランドと和解したことだけでした。クロムウエルの「王政回復を願う」考えはよく知られていました。ある日、クロムウエルが議論のなかでマーティン氏をふと「ハリー卿」と呼んだとき、マーティンはクロムウエルの話の腰を折って、深々とお辞儀をしてかれに、「陛下、あなたが王となられ暁には、わたくしに騎士爵をお与えくださるものとたえず期待しております」と述べました。しかしクロムウエルは、かれが王位につくと議会と不和になるであろうことは可能な限り避けようとしていたことは明らかでした。かれは、議会を完全に手中におさめていましたので、もし議会の指導者たちが、自分たちの弱点を認めたくらんで自分たちの信条を正面にださずに、クロムウエルに一時的な独裁権を与えるならば、かれのみがそれまでしてきたように、軍と議

会との良好な関係を保ち、合憲的に国家の安定のために議会と手をたずさえていくことを望んでいました。実際クロムウェルが可能なかぎり軍の不満を抑えていたことを示す証拠があります。ランバートの慢心にたいして、残余議会は激しく立ち向かいました。ランバートのくるくる変わる考えは、誤解のもととなりました。ハリソンは、しきりに「第五王国」を立ち上げたがっていました。クロムウェルがのちに述べているように、軍の聖徒たちは、「議会はよき人びと「聖徒たち」の手と働きによって開催されているのに、その感謝の気持ちをすっかり忘れてしまっている」ことに気づいていました。「法の改革については、多くのすばらしい言葉が語られています。他人の財産権にたいし負担を有する者」という一語をきめるのに何ヶ月以上もかかりました」とクロムウェルは付け加えています（カーライル、前掲書、演説一）。

一六五三年のはじめには、ヘンリー・ヴェーン卿は、それまでブレイクでの戦いを勝利に導くために働いていましたが、軍部支配の危険性——かれはそれをとくに恐れていました——について敏感になり、そのため新議会を設けるための法案を通すことを急ぎました。そしてこの法案をめぐる、かれとクロムウェルとのあいだで最終的決裂が生じました。この法案についてのことでした。この法案の主要な内容は、一六四七年から四八年の政治的不安のなかで、軍と平等派がだした請願書の内容と対応していました。それによると、議会は四百名の議員から構成されること、議員数は、諸州の富裕度と人口数にもとづいて割り当てられること、各都市においては、家長の払う地代を一定のものにするのと、各州においては借地人をしめだすような財産資格は制限されること、その下限値は、自由土地保有者は四〇シリング以上、土地贖本保有者は五ポンド以上、定期貸借者は年収二〇ポンド以上でした。この配分と資格の体系はのちにクロムウェルによって採用されましたが、財産資格については、不動産であれ動産であれ、二〇〇ポンドというきわめて高額なものでした。この法案にたいしてクロムウェルが反対したのは、既存議員は再選挙されずとも議席が与えられる権利をもつという点と、既存議員に新議員の資格を判断する権利を与えるという点でした。別の言葉でいえば、こ

の法案は、残余議会に再建作業を統制するための「やまたのおろち」のような不気味な独裁権を付与するものだったからです。そこでこれにたいして、クロムウエルはみずからの構想を対案として提出しました。それは再調整の目的のために知識人たちの集会を特別に招集し委託するというものでした。この構想は、「第五王国派」や共和主義の将校たちの要求を満たすものであると同時に、かれ自身の独裁権をおおい隠すものとして意図されたものであったということがすぐにわかります。例のごとくクロムウエルはまったく隠し隔てのない行動をしました。かれは、四月一九日に、議員たちと軍将校たちを集めて、かれの宿舎で会合をもち、議會を即刻解散することと知識人集会の必要性を力説しています。軍人以外でクロムウエルを支持したのは、セント・ジョンのみでした。これについてはクロムウエル自身は、ヴェーンの法案は提出されるべきではないという理解で会合は一致し閉じられたと説明しています。翌朝その会合は再開されましたが、「議員たち」はほんのわずかしか出席せず、そのうちのひとりにホワイトロックがいました。その会合の経過はかれの次の言葉に大変よく言い表されています（ホワイトロック、『回顧録』、第四卷、四頁）。「クロムウエルは、議會が開催され、そのもつとも名誉ある解散の仕方としては、自分たち自身で閉会することを願っていることを、この議論のなかで知りました。そこでクロムウエルは会合を中断しましたが、そのとき議員たちはかれをかれの宿舎にのこして立ち去り、議會へもどりました。そして議會ではある法案についての討議がなされていて、そのためには別の会議が必要とされ、それは議會の会期を延長するものでありました。これがヴェーンの提出した法案であり、クロムウエルによれば、ヴェーンはその法案を押し進め、それは前夜の約束を無視するものであります。インゴールドビー大佐によつて、議會でなにか議論されているかが伝えられたとき、クロムウエルは、「議會はただちに閉会すること以外、なにもしないと期待していたので激怒しました。かれは数人の将校たちに、兵士たちの一隊を連れてくるように命じ、クロムウエルはかれらとともに議事堂へやってきました」。そのあとの話がよく知られておりますので、繰り返す必要はないでしょう。そのさい、クロムウエルは即座に兵士たちをなかに入れたのではなく、「唯今から法案が可

決されます」という動議が議長によつて発せられるときまで、かれは自分の議席に静かに座っていたことが分かつています。そのとき、すなわち法の名の下に恒常的な少数者支配を制定しようとすることを阻止することが可能な最後の段階で、かれは激烈な調子で演説をし、そののち兵士たちを議場に呼び入れたのです。この危機状況におけるクロムウエルの行動は、かれの全公的生活において一貫しているように、かれの述べていることとまさしく一致しております。かれは、戦闘のときと同様に、議会のなかへも、分派セクトの人びとが信奉していた「待ち望む霊」「時を待つ霊」をもち込みました。かれは、そのできごとが必要であつたと解釈するさいに突然の靈感をその導き手として信じていました。ダンバーの戦いで、レズリーの隊列にみだれができた一瞬の隙を突いて、「神の霊がかれに強く臨み給うときがきた」として、クロムウエルはいまや「相手が」人間であることなどおかまいもなく、決定的な追撃を加えました。そして残余議会の解散がもはや避けられなくなつたことは、支持母体である軍から離れ、軍の要求を拒否しようとした時点において明らかとなりました。クロムウエルが常に主張していたように、軍は議会と同格な合法的な権威それ自体であり、いや議会よりもはるかに真実な「人民の」代表でありました。クロムウエルが議員たちを追ひだし、ドアに錠をかけたときの乱暴なやり方は、ホワイトロックによれば、「かれの無鉄砲さのうちでも恥ずべきもののひとつ」であり、かれの生きざまのうちでも他に例のないものでした。そしてこのことは、のちにクロムウエルが共和主義者たちと和解をはかるうえでむずかしいものとなつたことは間違ひありません。それについてのものとも明白な説明は、「わたくしの感情（情熱）がわたくしの理性に打ち勝つおろかな態度をとるときにうまくいくことを知っています」という私信を見ればわかります。大いに躊躇したのちに、危険があることがわかつているある決定的な行為をとろうとすると、それは以前から知られていましたが、ふつうは抑えることができる、荒々しい熱情を一気に解き放つことは、かれの性格における奇異な特性であります。チャールズズの死刑執行令状に署名するさいのかれの行動にも同様な特徴が見られました。

クロムウェルはいまや、残余議会が解決できなかった問題と取り組まなければなりませんでした。神の民は、自分たちのおかれた状態から救済される必要があります、この世界もかれらにふさわしいすみかとなるように、改革され調整される必要があります。しかしこれまでの講義でも示してきましたように、この課題の解決は、その性質上見込みのないものでした。聖徒たちの主張は、まちがったものであると同時に自己矛盾も起こしているところもありました。その主張がまちがったものであったというのは、かれらが無視しようとしていた世俗世界にもかれらの世界と同様な神聖な権利があったからでありますし、またその主張が自己矛盾を起こしていたといえますのは、極めて急進的である者のなかでさえ、自らの主張を絶対化し、他の主張を敵対視する者さえ出てくる始末であったからです。「そのことがわれわれの争いをむなしものにしていきます。各分派は『どうかわれに自由を』と言います。しかし自由を与えると、かれは、その自由を自分だけのものにするように全力をあげるのです」(カーライル、前掲書、第三演説)。にもかかわらず、クロムウェルの努力がまったく無駄であったとはいえませんが、五年もの間、問題の解決策を探りつづけたかれの情熱と統率力が、そのうえ「偽善」とさえ誤解されるまでに徹底したかれの同情心——しかし、これあればこそ、かれの側で諸分派側への情熱を失ったときでさえ、かれら諸分派の心はつかみつづけることができたのですが——とこうしたかれの生き方によって少なくとも聖徒たちと現世との間に平穏をもたらし、良心の自由を確保でき、また反動的な高位聖職者たちががやつきとなって聖徒を完全におさえることができなかつた状況のなかで良心の自由を保持することができました。しかしかれは、一方では聖徒たちの利益を守りながらも、しだいにかれらの主張を抑圧せざるをえなくなりました。クロムウェルが晩年にとらざるをえなかつた政策は、聖徒たちとじよに距離をおき、旧体制の利益をはかることになったのでした。

残余議会を解散しても、行政上の混乱はまったく起こりませんでした。クロムウェルは、軍将校たちの会議において総司令官として、すべての公務員に自分の仕事を続行するように命じ、知識人グループを招集して法を制定する権限

のある会議体といたしました。この変更は、おおむねピューリタンの考えに近いものでありました。クロムウェルは、「わたくしは議会にたいして、「議会の解散がどういう意味をもつか」他の誰よりも分かっていたと伝えました。なぜならこれまでわたくしは各地方を訪れることが多かったので、「地方選出の」議員のなかで国家に嫌われるような人物はどういうタイプの人物であるかを知る機会が多かったです。わたくしは分かっていたのです。かれらは解散を命じられても犬のように吠え立てることもなく、目に見えるようなかたちで不満をあらわにすることもないだろうということ」（「カーライル、前掲書、第三演説」とのちに述べています。すべての地方から寄せられた、「解散を」祝福するあいさつが、クロムウェルの発言がきわめて正しかったことを示しています。そしてクロムウェルが気をつかったのは、共和派のローマ的共和主義者ではなく、いまでもその情熱の火がくすぶっている第五王国派の者たちをどう処置するかということでした。なぜならクロムウェルは紛争解決の必要のためには第五王国派と決裂せざるをえなかったからです。このことはすぐに知識人グループの会議体において明らかになりました。かれらは、執行評議会を選出し、クロムウェルはその評議員となりました。それから五ヶ月がなにごともなく過ぎました。その後、ハリソン将軍が代表となった第五王国派は、「スクイブなる人物の家」でハリソンと会見した再洗礼派の聖職者たちの激励をうけ、第五王国派の熱狂振りには手に負えないものとなりました。かれらの運動は、「聖職者たちと官僚たち」との間で衝突をもたらし、十分の一税および大法官裁判所庁の廃止にせよ、またモーセの裁判法の制定にもせよ、「聖書そのものに立って、自由に解釈する個々人の知恵に従って」決断するように求めることになりました（カーライル、前掲書、第一三演説）。この事態が、「知識人グループの」会議体の解散につながりました。それがクロムウェルの圧力によったものであったかどうかは不明ですが、かれがそれをよしとしたであろうことは確かだと思えます。それ以来、世間は当然受けるべき利益、また確立されてきた「公共の」利益は維持されるべきであることを、かれは人びとに明確に知らせました。その数日後に、國務会議はかれに「統治章典」を提出しました。その内容は、自由な議会——これは、アイアトン、ヴェーン、

クロムウェル自身の当初の構想にしたがって選挙されるべきものであった——とプロテクター制「護民官的独裁制」を確立するというものでした。クロムウェルはこの「統治章典」をもとに四年間統治し、その間かれの第二議會で採決された「請願と助言」が可決されて「統治章典」に取って代わりました。この内容は政治体制を實質的に変更するものではありませんが、「その後の」議會制の基盤となりました。

プロテクター制は、少なくとも事態を安定させるという偉大な目的にきわめて忠実なものであり、また「その権力が」いかに独裁的なものであろうともそれがまったく正義にかなったものであるべきでありました。それは、現代の独裁制がしばしば用いる策略である、公的な役職や機関の命じるごまかしとはまったく別物でした。クロムウェルの三つの計画——許せる範囲内での「革命前の政治」体制「制限・混合王政」の回復、法の改革、ピューリタン聖職者の権益の保護——は、実際のところ相互に矛盾していません。「革命前の」政治体制への回復は、王制の復活なしには不可能でありましたし、王制を復活させることはピューリタン聖職者の王制への従属を意味しました。いつぼう、政治体制「制限・混合王制」の基盤がないところで法を改革しても、それはひとりの人物「クロムウェル」の垂らす細い糸のみぶら下がっているようなものでした。しかしながら、憲法を制定して統治しようとするクロムウェルの努力は、純粹なものであり、一貫していました。かれがつねに重要なものとして強調していた二つの条件は、プロテクターの絶対的な統治権と、良心の自由の維持でありました。プロテクター制を放棄すればすぐさま、「自分はほうむり去られ、汚名をかぶせられるであろう」し、また真の国民代表者としての軍隊こそが、主教制や長老制よりも良心の自由を重視し、そのために血を流してきたのだと、かれはつねづね言っていました。軍隊を放棄することは、かれがもつとも尊び信頼しているものを冒瀆まくすることであつたでしょう。かれは、これら二つ「プロテクター制と良心の自由の保持」を条件にして、それ以外のことは議會にまかせようと思いました。しかし、第一に少数派の共和主義者たちが、次に多数派の長老派が同意しようとはしませんでした。かれの第一議會では、ソツツイーニ主義者のビドルを投獄し、第二議會では、貧

民の出であるクエイカーのジェームズ・ネイラーを危うく火刑に処するところでした。最終的には火刑は免除して、さし台に乗せて舌に穴を開けました。これら両方の件についてはクロムウエルは反対しております。しかしかれが議会と決定的に決裂したのは、一人物による統治「クロムウエル」の可否を議論せよと議会両院が主張したことにあります。チャールズ・ステュワートの名において、「下賤の徒オリヴァー・クロムウエル」を暗殺すべしとする声明文が出て王党派の謀略がわかり、それにたいしてユダ族の旗のもと、「王イエス」のために戦わんとして第五王国派が結集するときに、両院の動きを座視することは「すべてを再び流血状態へと逆行させること」を意味していたと言えるでしょう。

こうしてクロムウエルは、国務会議の法令によって法改革をおこない、また宗教問題を解決することを強いられたのであります。これらの法令の大部分は、かれの第二議会によって承認されました。このようにクロムウエルは大法官庁を改革し、法手続きを簡略化いたしました。教会にかんしては以前に説明いたしましたように、「神学者」会議の解散以来、正式な制度はなく、聖職禄をえるための唯一公認された方法は、長老派による聖職叙任式でした。もつともすべての者がこの方法にたよったわけではありませんが。クロムウエルはこれを、聖職叙任委員会に代えました。この委員会は長老派、独立派、バプテイストの説教者たちからなり、さらに一定数の平信徒もふくんでいました。そしてこの委員会が承認するまでは、だれも十分の一税を要求することはできませんでした。ところでこの委員会は、その権限を各州の低位委員会に委託していたようです。その他のいくつかの州委員会は、「不道徳で、無知で、その職に適さない聖職者たちを見つけて排除する」ために設立されたものでした。そして教会財産を、より公正に分配するための法令が、教会改革を完成させたのでした。

この教会計画は公正に遂行され、主教制の「継承」——それにはクロムウエルは不同意であった——を信奉していた者たちを除いて、これまで以上に門戸は開放されました。たとえばバクスターのいうところの主教主義者たちとアルミ

ニウス主義者たちは、他の者たちよりも聖職叙任執行者たちによつてきびしく取り扱われたことがあつたとしても、いまでは聖職禄をえる道が開かれました。高位聖職者たちでさえ、陰謀にかかわらない限りは、会衆を集め共通祈禱書を用いて礼拝することが許されました。長老派の体制下では、このようなことは考えられないことでした。クロムウェルが全体的な調整をはかつて、改革と信心に忠実であつたことは、バクスターとバーネットが実際に目撃した証言がそのもつともよい証拠であります。両者とも王制支持者であり、バクスターは少なくとも個人的にはクロムウェルに友好的な感情をもつていませんでしたが。

クロムウェルが合理的な統治の制度のなかに組み込んだいくつかの要素がままならなくなつてきたことは、かれの死期が近づいた頃にはあきららかとなりました。この講義には時間的制約もありまして、ここでは王政復古にいたるまでの「政治」過程を詳細にたどることはできません。ともかくしばらくの間、フリートウッドとランバート率いる、クロムウェルが最後まで掌握していた将校団と、リチャード・クロムウェルを支持したサーロウ「一六一六―一六八」とホワイトロック「一六〇五―一七五」らのような文字通りの政治家たちからなる追従派ついでと、ヴェーンとスコット率いる共和派の間での三つどもえの争いが続きました。フリートウッドの鳴りを鎮めていた熱狂が、再び神の恩寵の支配を求める熱意となつてわき起こりました。かれは、クロムウェルが遠隔地に配置していた将校たちをロンドンに集め、より過激な聖職者たちと共謀するのを放置していました。ヘンリー・クロムウェルは、アイルランドからこの状況を見て、これから起こることを察し、クロムウェルの息子として当然なことでありますが、フリートウッドに忠告しています。しかしフリートウッドはそのような忠告に聞く耳をもたず、ついにリチャード・クロムウェルを失脚させ、残余議會を回復するために共和派と結託いたしました。もつとも、共和派は、一六四八年ほどには、兵士たちを支持することに今回はためらうことはありませんでしたが、しかしかれらとの同調は長くは続きませんでした。残余議會はすぐに大胆にも将校たちのうちの危険人物を免職いたしました。そして、後に、熱狂主義者たちを除外した軍隊のちを連れてスコットランドから

「ロンドンに」接近していた將軍モンクの要請によつて、フリートウッドの連隊をロンドン市の外へ移しました。状況は今やモンクの指揮下にありました。いまだにほとんどの説教壇を確保していた長老派は、自分たちの要求を再び主張しはじめました。そして信念を欠く人物モンクは、長老派と組んで強力な党派を形成しました。クエイカーたちと諸分派を抑える法令を次々と決議したのち、かれらはチャールズ・ステュワート「チャールズ二世」のまことしやかな約束に耳を傾け、すでにカトリック教徒と改宗していた王と、長老制は紳士の宗教ではないと強く確信していた宮廷に身を託しました。

このようにして、靈的な自由が実現するという情熱が現実的となつた冒険的な企ては、一見したところ大失敗に終わりました。革命の唯一の成果は、封建制が絶対王制に移行することを阻止し、ウィリアム三世の死後インクランドを支配してきた封建制のもとで、富裕階級「ブルジョアジー」へ道を準備したことであるようにみえるかもしれませんが。しかし、これは表面的な見方にすぎません。ピューリタニズムの短期間の勝利は、インクランドに二つの明白な利益をもたらしました。ひとつは、インクランドをカトリック反動からインクランドを救つたこと、もうひとつは、「非国教派集団」をつくりだしたことであります。それは、ロード的な狂信的聖職尊重主義から、近代インクランドの聖職者の上品で聖職尊重主義を重視する方向への取るに足らない変化にすぎないと思えるかもしれませんが。しかし、クロムウエルの剣が諸分派の教会に与えた一五年間の結果生まれたたくましい成長は、どのような反動勢力といえども分派教会に抑圧することのできないような永続的な力を与えました。それ以来分派教会は、インクランドの政治生活における偉大な源泉となつてきたのです。しかもクロムウエルとヴェーン「が人びとを息づかせた」高貴な情熱は、たんにピューリタンたちやインクランド一国にとどまるものではありませんでした。それは、^{エフクスター}忘我、神秘主義、静寂主義、哲学として、この世の物欲的な利害関心とはつねに衝突する普遍的な靈的力であります。そしてこの靈的力は一時的に勝利をえましたが再び打ち負かされました。しかし結果的には、その力は物欲的な利害関心を変質させ徹底的にみずからに仕え

させるようにするのです。ヴェーンは断頭台において、「死という言葉は言うのは簡単ですが、死ぬことは大変な仕事です」と言いました。このようにかれ自身の情熱は再びよみがえるために死んだのです。それが感情の弱さのなかに植えられたのは、知的な理解のなかでよみがえる力をえるためであったのです。かれはまた、「イングランドの民衆は長い間眠っていました。だからかれらが目覚めるときには情熱に飢えを感じることでしよう」と述べています。民衆はさらに二百年間眠り続けてきたと言うことができるでしょう。もしかれらが目覚めたとき、飢えを感じるとすれば、求める糧^かはどこにあるのでしょうか。かつてヴェーンが盲目と未熟の壁に出会って、提案することさえできずじまいに終わった思想が、かれ自身さえ夢想だにしなかった哲学「政治・社会思想」のおかげで明瞭な姿、成熟した姿をとって現れるにいたる思想こそ、その糧なのであります。